

豊橋市議会傍聴記

地方政治
クリエイト
伊藤 秀昭

■まちなかに第2アリーナ

佐原市長の公約にある「プロスポーツにも対応した第2アリーナの整備」について議論したのは伊藤篤哉氏(自民)。

「バスケットボールを核としたまちなかに」という課題に、三遠ネオフェニックスのホームタウンとしての豊橋市がどう応えていくのか、注目される質問。
堀内副市長は「目指すべきアリーナは多機能、多目的でエ

ンターテインメントが高く、まちの活性化へつながるものであるべきだ」と定義づけ、そのためにもアリーナの立地は「まちなか」であるべきだとキツパリ。

いつも目いっぱい時間を使う伊藤氏も、持ち時間を30分以上も残して「アー」

新潟アルビレックスBBと長岡市のよゆうな一体感が、豊橋で醸成されるかどうか。
■失格判断基準
寺本泰之氏(紘基

会)は今回も失格判断基準の違法性について取り上げた。
財務部長は、豊橋市民病院公金支出差

し止め請求事件での名古屋高等裁判所の控訴審判決、さらには最高裁判所への上

告も棄却の事実か

ら、「司法の場で適法である」と判断されていると突き返した。

フェニックスでまちなかが変わる？

すき会)は、三遠ネオフェニックスのホームアリーナに市体育館受け入れの経緯や集客状況について質問した。

教育部長は「15年6月にフェニックスから市に対してBリーグ1部への入会を

申請するにあたり、市総合体育館を主要アリーナとしたい旨の依頼があり、従来からの地域密着型のプロスポーツを指す趣旨に賛同して受け入れを決めた」と答弁。集客については16試合終了時点で

の1試合の平均は約2200人でありファン層の拡大が十分とした。

長坂氏は、5000人規模の第2アリーナまで作ろうとする豊橋市にはフェニックスのホームタウンとしての本気度が

弱すぎるとして、全心力での取り組みを要請した。

フェニックスが起爆剤となって、まちを変えるかどうか。

口減少対策は地域間での人口の奪い合いではないか」と質問したのは芳賀裕崇氏(まちなかフォーラム)。

企画部長は「人口減少対策の根本は、誰もが安心して子どもを産み育てられる環境を整え、長期的

に人口の維持が可能レベルにまで出生率を高めることにあり」として、減りゆく人口を地域間で奪い合うゼロサムゲームでは、いつか立ち行かなくなるとした。

芳賀氏は、人口を獲得するために地域

や対象層を明確にして、戦略的にアピールや政策を展開している自治体がある」とから、これでもいいのかと警鐘を鳴らし、定住人口や交流人口を増やすためのイメージづくりの重要性を強調した。同感である。

■院内保育所

市民病院の院内保育所の運営と病児保育について取り上げたのは中西光江氏(共産)。

市民病院事務局長は「運営においては利用する子どもとその保護者にとって安定した経営の下で、安心、安全な保育が

行われることが重要であることから、15年度より、現在の運営事業者となっている」と答弁。定員についても30人定員であるが、50人まで対応できるような弾力的な対応になっていると答えた。

中西氏は民間事業者に運営委託することとは良としても、5

年ごとに変更するやり方は、乳幼児の子どもの特長や保育士の経験・信頼、保育の継続性の立場からどうなのかと疑問を呈した。

保育士経験からの質問は説得力があった。